



美をつくし

vol. 190

大阪市立美術館だより
平成30年9月1日発行

《観瀑図》（『名賢宝絵冊』のうち）

MI WO TSUKUSHI

ルーヴル美術館展 肖像芸術 — 人は人をどう表現してきたか

2018年9月22日(土) — 2019年1月14日(月・祝)



①



②



③



④



⑤



⑥

ただ一人の人物に似せていること—「肖似性」を本来的特徴とする肖像は、西洋において主要な芸術ジャンルの一つでした。当初は王侯貴族、高位聖職者だけが肖像を制作することができましたが、次第に一般の人びとの間にも広まってきました。

そもそも肖像は、はるか古より幅広く多くの人びとを魅了してやみませんでした。肖像の起源に位置づけられる作品の一つであり、3000年以上前の古代エジプトにおいて普及していたミラの顔を覆う棺用マスク(写真①)は、故人の容貌に似せたものではなく、様式化された顔立ちをしていました。1-3世紀頃になると、ミラの顔は板に描かれた肖像画で覆われるようになります(写真②)。この時代の肖像画は写実性・肖似性が重視され、故人の生前の顔立ちが生き生きと描写されたのです。二つの作品は、来世での生を死者に確約するという同じ願いに根差し、同じエジプトで制作されながら、「理想」・「様式」と、「写実」・「肖似」という対極的な表現をなすと同時に、あらゆる肖像作品に通底する問題を象徴的に示しています。

本展では、紀元前の古代メソポタミアの彫像や古代エジプトのマスクに始まり、19世紀ヨーロッパの絵画・彫刻まで、きわめて広範にわたる時代・地域の作品を対象としながら、肖像の担ってきた社会的役割や表現上の特質を浮き彫りにすることが主要なテーマの一つですが、16世紀ヴェネツィア派の巨匠ヴェ

ロネーゼによる《女性の肖像》、通称《美しきナーニ》(写真③)は、27年ぶりに来日を果たす名画であり、見どころの一つとなっています。この肖像画に描かれた女性の眼差しは、鑑賞者の視線と交わるのではなく謎めいて見えることでしょう。

一方、王妃マリー=アントワネットの肖像画家を務めていたヴィジェール・ブランの傑作の一つは、正面を見つめる伯爵夫人の優しげな雰囲気が感じられ(写真④)、15世紀後半イタリアのフィレンツェで活躍したポッティチェリとその工房が手がけた男性の肖像(写真⑤)では、顔をやや斜めに向けて涼しげな表情をのぞかせます。

一連の肖像作品は、自らの理想や外見の単なる再現を超えて、私たちの心の深淵に潜む、願望や愛慕ばかりでなく、悲哀、憂苦、恐怖などといったいくつもの感情を呼び覚ましなから、驚くほど多様で複雑な芸術性を呈しています。さらに肖像は—16世紀後半の奇才の画家アルチンボルドの作品「四季」連作に属する《春》(写真⑥)を例にとってみると、モデルの姿を描いた「肖像画」であると同時に、それを構成する花の一つ一つを識別した「静物画」という多義性をも帯びているのです。

このように身近でありながら、奥深い肖像芸術の魅力に迫るべく、本展ではルーヴル美術館が誇る豊かなコレクションおよそ110点の作品でたどりま。どうぞ心行くまでお楽しみください。

①《棺に由来するマスク》 新王国時代、第18王朝、アメンヘテプ3世の治世(前1391-前1353年)エジプト出土
Photo © RMN-Grand Palais (musée du Louvre) / Franck Raux / distributed by AMF-DNPartcom

②《女性の肖像》 2世紀後半 エジプト、テーベ(?) 出土
Photo © Musée du Louvre, Dist. RMN-Grand Palais / Georges Poncet / distributed by AMF-DNPartcom

③《女性の肖像》、通称《美しきナーニ》部分 ヴェロネーゼ(本名/オロ・カリアーリ) 1560年頃
Photo © RMN-Grand Palais (musée du Louvre) / Michel Urtado / distributed by AMF-DNPartcom

④《エカチェリーナ・ヴァシリエヴナ・スカヴロンスキー伯爵夫人の肖像》部分 エリザベート=ルイーズ・ヴィジェール・ブラン 1796年
Photo © RMN-Grand Palais (musée du Louvre) / Michel Urtado / distributed by AMF-DNPartcom

⑤《赤い緑なし帽をかぶった若い男性の肖像》部分 サンドロ・ポッティチェリと工房 1480-1490年頃
Photo © RMN-Grand Palais (musée du Louvre) / Michel Urtado / distributed by AMF-DNPartcom

⑥《春》 ジュゼッペ・アルチンボルド 1573年
Photo © RMN-Grand Palais (musée du Louvre) / Jean-Gilles Berizzi / distributed by AMF-DNPartcom

フェルメール展

2019年2月16日(土) — 5月12日(日)

2019年2月、あなたは大阪にいますか?
2000年に当館で開催した特別展「フェルメールとその時代」は日本で最初のフェルメールを主題とした展覧会として、その後の日本におけるフェルメール・ブームの先駆けとなっただけでなく、美術館業界におけるちょっとした事件でもありました。当時の興奮をご記憶の方もいらっしゃるでしょう。あれから20年近くの歳月が過ぎた今も、フェルメールの美しく静謐な画面を求める人々の熱いまなざしは変わりません。
お待たせいたしました。フェルメールが大阪市立美術館に帰ってきます。



ヨハネス・フェルメール(1632-75)は17世紀オランダ黄金期を代表する偉大な画家のひとりです。本展は長らく世界のフェルメール研究を牽引し続けるワシントン・ナショナル・ギャラリー元学芸員アーサー・K. ウィーロック Jr. 氏を総合監修にお迎えし、現在35点が知られるフェルメールの作品の中から選りすぐりの作品をご紹介します。このうち《恋文》は大阪会場のみで展示されます。フェルメールが世界中で愛される秘密を会場でご確認ください。2000年のあの興奮を体験された方も、初めてフェルメールの世界に触れる方も、この機会をどうぞお見逃しなく。

《恋文》 ヨハネス・フェルメール 1669-70年頃
アムステルダム国立美術館

大宮神社(山鹿市)の土佐光起筆「三十六歌仙図扁額」

— 和歌筆者・葛岡宣慶^{くす おかのぶ よし}に注目して —

(「かどおか」とも読まれている)

「土佐派による近世やまと絵様式の確立と展開に関する基礎的調査研究」(平成28・29年度ポーラ美術振興財団研究助成による)の調査成果を中心に、さきに特別陳列「土佐光起生誕400年 近世やまと絵の開花-和のエレガンス-」(平成29年9月2日~10月1日)を開催した。この展覧会以降実施した調査で確認できた重要な未紹介作例として、熊本県山鹿市の大宮神社に伝来する土佐光起筆「三十六歌仙図扁額」(全36面、板地着色、各外寸45.6×30.2cm、以下、大宮神社本という)がある。

その三十六歌仙は業兼本をベースとするオーソドックスな図像がほとんどである(図1)。歌仙の上半身周囲の木地を金箔や金泥で被わず、木目を生かした淡雅な趣きに仕上げる。面貌の肉身色には艶やかな透明感があり、上・下脛、頬、小鼻の周囲、耳の窪みに淡い朱の隈を入れるほか、ひげや頭髮を柔らかな細線を引き重ねて描き、瑞々しい生氣、個性的な表情を与えている。袍、狩衣、直衣、女房装束など着衣の賦彩は金泥をまじえて重厚になされ、多彩な文様表現も精緻を極めるなど、やまと絵本流の絵師による確かな画技が看取される。

大宮神社本の品質の高さは、極めて良好な保存状態にもあらわれている。一面ずつ畳紙で包まれた扁額の大方には目立った汚れや損傷がなく、彩色は鮮やかな発色を保持し、和歌墨書も含めた各種表現の経年劣化を最小限にとどめる。舟運で栄えた山鹿の富裕な町衆による奉納(時期は不詳)と伝えられるが、社殿長押などに掲げられたまま放置に至ることなく保管されてきたこと(現存木箱は大正4年新調)も幸いしたであろう。光起による類品に出雲大社本があるが、木地に貼った和歌料紙はほとんど切り取られて惜しくも外観を損ねており、36面が完好な大宮神社本の存在意義は非常に高い。

左一・柿本人麿、右十八・中務、それぞれ裏面の下方・左右端に、土佐光起と色紙形和歌の筆者である葛岡宣慶の落款「土佐左近衛将監藤原光起筆」、「葛岡修理権大夫源宣慶朝臣/書之」が認められる(図2)。詞(賛)の染筆者が判明する光起作品は肖像画等ごく少数のみで、ほとんどは極札や箱書による伝承筆者の域を出ないことから、宣慶の一筆によることがわかる大宮神社本はその資料性の点でも高く評価されよう。では、葛岡宣慶とはどういった人物であったのか。

『庭田家譜』、『諸家伝』等の記録によれば、葛岡宣慶(1629~1717、のち宣之に改名)は右中将・庭田重秀の二男で、寛永19年(1642)元服、従五位上修理権大夫。『隔蓑記』には慶安5年(1652)7月以降、後水尾院の院参衆として名を録される。承応3年(1654)従四位上に昇った後は伝が途絶え、院参の新家としては一代で絶家する。というのもこの後、宣慶は官途を離れて大坂へ下り、居所を新歌林苑と呼び、多数門人を指導する地下歌人として長い後半生を生きたのである。元禄9年(1696)の『難波丸』、ある

いはこれを吸収再版した元禄10年『国花万葉記』にはまだ「歌学者 上町 葛岡殿」の記載がある。その後、五辻家を相続する子の広伸を後見のため帰洛した。

若くして宣慶が下野した理由はよく知られない。姉の庭田秀子は後明天皇の大典侍となり女一宮を産んでいたが、承応3年の後明天皇崩御により状況一変し、落飾して後宮を退いた。後西天皇踐祚をめぐって、秀子の近親者であった宣慶も仙洞周辺から遠ざけられた(『史學雑誌』第8編第8号/明治30年)ともされるが、『隔蓑記』に明暦2年(1656)4月までは消息があり、宣慶が大坂へ下ったのはこれ以降間もなくのことと推定される。

百人一首、三十六歌仙、伊勢物語など伝存する宣慶の記名本にあたる限り、款記はすべて「源宣慶」である。葛岡姓とともに官位まで記す大宮神社本の款記は唯一の例で、数少ない在京期の署名と考えられる。すると大宮神社本への和歌染筆は、光起が左近衛将監に任ぜられて宮廷絵所預への復帰を果たした承応3年から、明暦2年頃と推される宣慶(28歳)の下野まで、僅か二年余りの間になされた公算が高いのである。つまり、新生やまと絵の旗手となった光起が自らの清新な画風を知らしめんと、全力を傾けて取組んだ将監時代最初期の歌仙絵として大宮神社本をとらえることができる。その制作背景にも関わる在京期の宣慶周辺について大方のご教示をお願いするものである。

最後に、本作品の調査、画像掲載にご高配をいただいた大宮神社に対しまして深謝申し上げます。(知念 理)



(図2)光起、宣慶落款(中務裏面)

(図1)㊶柿本人麿 ㊷中務

生誕150周年記念 あ べ ふ さ じ ろ う 阿部房次郎と中国書画

2018年10月16日(火) — 11月25日(日) 会期中展示替あり
 (前期:10月16日—11月4日/後期:11月6日—11月25日)

特別協力:東京国立博物館

助成: 公益財団法人 花王 芸術・科学財団



阿部房次郎(1868-1937)

※作品の展示期間や関連企画など詳細については美術館 HP をご確認ください。

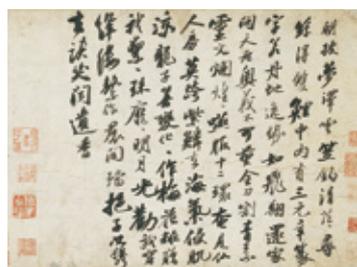
大阪市立美術館のコレクションは日本や中国の美術が中心であり、その収集を方向づけたといえるのが、阿部房次郎旧蔵の中国書画160件の受贈でした。美術館が開館して6年後の昭和17年(1942)、房次郎の子息・孝次郎氏によって寄贈された作品の中には、伝王維「伏生授経図」や蘇軾「李白仙詩」など重要文化財に指定された4件をはじめ、燕文貴「江山樓観図」ほか中国美術史上きわめて希少な優品が数多く含まれています。阿部コレクションの大半は絵画で、個人の収集でありながら、唐から清まで中国歴代の絵画を通観することができる点も特色といえます。

2018年は収蔵家の阿部房次郎が生まれて150年をかぞえます。慶応4年(1868)、彦根藩士・辻兼三の長男として生まれた房次郎は、上京して慶應義塾に学んだ後、近江の巨商・阿部市太郎の養子となり、実業家として大成しました。大阪に本社をおいた東洋紡績株式会社(現 東洋紡株式会社)社長を務めるなど、日本の近代産業の発展に対す

る功績から、昭和6年(1931)には貴院議員に勅撰されました。事業のかたわら、東洋美術を愛好した房次郎は、京都帝国大学教授の内藤湖南(1866-1934)や漢学者の長尾雨山(1864-1942)らの助言のもと、中国の古書画の収集に情熱を注ぎます。入手した作品は秘蔵することなく、求めに応じては披露し、つねに公に資すること望んでいました。没後、作品が散逸することを憂い、後世へと伝えられていくことを願った房次郎の遺志により、美術館へと一括寄贈されることになりました。

氏の生誕150周年を記念する本展では、大阪市立美術館所蔵の阿部コレクションから主要な作品を一挙に公開するとともに、東京国立博物館の協力のもと、房次郎旧蔵の中国古代封泥や書法作品を一堂に会し、収集の全容に迫ります。また中国書画の収集にあたって築いた文化人との交流に目を向け、近代日本における阿部コレクション形成の意義について、改めて考える機会としたいと思います。

(森橋なつみ)



①



②



③



④



⑤

①重要文化財《李白仙詩》(部分) 蘇軾 北宋時代・元祐8年(1093)

③重要文化財《伏生授経図》 伝王維 唐—宋時代

②《江山樓観図》(部分) 燕文貴 北宋時代・11世紀

④《墨蘭図》 鄭思肖 元時代・大徳10年(1306)

⑤《藤花山雀図》 蔣廷錫 清時代・18世紀

人物を描く — 美人画と自画像 —

2018年9月22日(土)–10月21日(日)

最も長い歴史を持つ芸術ジャンルとされる肖像ですが、日本においても様々なかたちで人物の姿が表現されてきました。本展示では、館蔵・寄託の作品から、近代の日本画家たちによる美人画や、洋画家たちによる自画像を中心にご紹介いたします。



《芸能譜》(右隻) 中村貞以
昭和18年(1943)
本館蔵(住友コレクション)
※昨年度の修理後、初公開の予定。

コレクター山口謙四郎の眼

2018年9月22日(土)–10月21日(日)

本館蔵山口コレクションは、実業家・山口謙四郎(1886-1957)が蒐集した中国の彫刻125点・工芸99点からなります。



これらは制作された年代・地域も多様ですが、華美に陥らず趣のある作品が多いのが大きな特徴です。ここでは陶磁・金工をはじめとする工芸作品を中心にご紹介いたします。

《黄釉緑彩水注》長沙窯 唐時代・9世紀
本館蔵(山口コレクション)

おおさかの仏教美術 1

2018年9月22日(土)–10月21日(日)

当館は開館以来、近畿をはじめとする神社、寺院よりご宝物をお預かりしております。今回はそのうち、大阪府に所在する約50の社寺に伝来したご宝物をご紹介します。商都大阪の信仰のよりどころとなった社寺は文化財保護の担い手としても重要な役割を果たしてきました。幾度の天災、戦災を乗り越えて、この地に伝わった仏教美術作品をご覧ください。



重要文化財《仏涅槃図》(部分)
鎌倉-南北朝時代・14世紀 大阪・長宝寺

めでたづくし — 鍋島焼の吉祥文様 —

2018年11月27日(火)–2019年1月14日(月・祝)

江戸時代、佐賀藩から将軍家への献上品とされた鍋島焼。そこには技術の粋が尽くされるだけでなく、長寿や富貴など、おめでたい意味や幸福への願いを託した文様——吉祥文様が多く取り入れられています。新春を寿ぐにふさわしい、鍋島焼の世界をご堪能ください。



《色絵 松竹梅文皿》鍋島焼
江戸時代・17世紀末–18世紀初
本館蔵(田原コレクション)

辻愛造を歩く — 昭和風景アンティーク —

2018年11月27日(火)–2019年1月14日(月・祝)

辻愛造(1895-1964)は大阪市生まれの洋画家です。赤松麟作に師事、上京して太平洋画会研究所で学んだ後大阪に戻り、



《菊人形》辻愛造 昭和7年(1932)
本館蔵(寺澤清子氏寄贈)

国画会(国展)に出品を続けました。辻のライフワークともいえるべき関西の昭和風景—都市と自然—の魅力を、これまで未紹介の油彩画小品、スケッチ類とともに振り返ります。

江左の風流 — 六朝石刻書法 —

2018年11月27日(火)–2019年1月14日(月・祝)

3–6世紀、長江東岸の建業・建康(今の南京)を都に、呉・東晋・宋・齊・梁・陳の六つの漢民族王朝が興りました。貴族たちは爛熟した文化を育み、王羲之らが尺牘(書簡)などに妍妙な書を競いました。一方、数こそ少ないですが、本展でご覧いただくような優れた石刻の遺例も存しています。



《天發神讖碑》(部分)
呉・天璽元年(276)
本館蔵(師古齋コレクション)

啓蟄! 考古遺物コレクション

2019年2月16日(土)–3月24日(日)

当館のコレクションには鑑賞を目的として制作された美術作品だけでなく、出土した考古遺物も多く含まれます。土の中から顔を出したいわば歴史の証言者たちには人の手から手へ



《金銅 独鈷杵》伝鳥取県倉吉市出土 平安時代・11世紀
本館蔵(田万コレクション)

と伝わった伝世品とはまた違った味わいがあります。そのたたずまいをご堪能ください。

節句を彩る — 人形と漆工 —

2019年2月16日(土)–3月24日(日)

3月3日は桃の節句。本年は雛人形をはじめとして、京都を中心に製作された人形を展示いたします。人形製作の本場である京都において、数々の名品を生み出してきた丸平・大木平藏の人形は、



繊細な造形と華麗な衣裳などが見どころです。また端午の節句で飾られる武者人形の勇壮な姿や、節句にちなむ漆工品もご覧いただけます。

《端午蒔絵組杯(節句蒔絵組杯のうち)》
江戸時代・19世紀
本館蔵(カザールコレクション)

コレクション展

都市を描く — 洛中洛外図と名所図会 —

2019年2月16日(土)～3月24日(日)



《洛中洛外図》(右隻部分)
江戸時代 本館蔵(下村裕氏寄贈)

京都を俯瞰して描いた「洛中洛外図」と、名所を文章と挿絵により紹介した「名所図会」。屏風と冊子、肉筆画と版画というように両者は大きく異なりますが、どちらも近世の都市を説明的に紹介したものと いえます。描かれた都市の諸相をお楽しみください。

所蔵作品の貸出

他館への貸出を予定している当館所蔵作品です。コレクション展ではあまり展示機会がない作品もあります。貸出作品の近くへお出かけの際にはお見逃しなく！ 展示期間などの詳細は各施設へお問い合わせください。

米友仁《遠岫晴雲図》(阿部コレクション)ほか 計6件

岡山県立美術館(岡山市)
2018年8月31日(金)～9月30日(日)
「生きてある山水 廬山をのぞむ古今のまなざし
Working Scape: Respect the True Nature of Mt.Lu」



《青磁陰刻牡丹文輪花碗・托》(田万コレクション)ほか 計2件

大阪市立東洋陶磁美術館(大阪市)
2018年9月1日(土)～11月25日(日)
「高麗青磁—ヒスイのきらめき—」



重文《円型図案集(小西家伝来・尾形光琳関係資料のうち)》

筆の里工房(安芸郡熊野町)
2018年9月22日(土)～11月4日(日)
「筆が奏でる琳派の美」



《池大雅二十五回忌追善会案内状》

鳥取県立博物館(鳥取市)
2018年10月6日(土)～11月11日(日)
「鳥取画壇の祖 土方稲嶺
— 明月来タリテ相照ラス—」



上田公長《芭蕉涅槃図》ほか 計2件

柿衛文庫(伊丹市)
2018年11月17日(土)～12月24日(月・祝)
「どうぶつ俳句の森」



《IHS紋香合》

長崎県美術館(長崎市)
2018年11月23日(金・祝)～2019年1月27日(日)
「クアトロ・ラガッツィ 桃山の夢とまぼろし
— 杉本博司と天正少年使節が見たヨーロッパ」



《扇面藤萩蒔絵螺鈿硯箱》(田万コレクション)ほか 計4件

サントリー美術館(港区)
2018年11月28日(水)～2019年1月20日(日)
扇の国、日本(仮称)
山口県立美術館へも巡回



特別展

オーバリン大学 アレン・メモリアル美術館所蔵
日本を愛した米国女性 メアリー・エインズワース
浮世絵コレクション(仮称)

2019年8月10日(土)～9月29日(日)



明治後期に来日したメアリー・エインズワースは、浮世絵の美しさに魅せられ、貴重な初期浮世絵をはじめ、鈴木春信や喜多川歌麿の美人画、葛飾北斎や歌川広重の風景画などを収集しました。

そのコレクションは、彼女の出身校であり、1833年の創設以来、性別や人種で差別することなく学生を受け入れたオーバリン大学のアレン・メモリアル美術館に収蔵されています。およそ1500点余の浮世絵コレクションの中から選ばれた約200点で構成する初めての里帰り展です。日本を愛した米国女性の優れた感性により収集された、美しい浮世絵の数々をぜひご覧ください。



上:《富嶽三十六景 尾州不二見原》 葛飾北斎 天保2年(1831)頃
下:《婦人相学十躰 面白キ相 相見》 喜多川歌麿 寛政4～5年(1792～93)頃

◆表紙作品紹介

《観瀑図》(『名賢宝絵冊』のうち) 南宋時代・12～13世紀
本館蔵(阿部コレクション)

阿部房次郎蒐集の中国書画を代表する宋元時代の名品の多くは、清末の大コレクター完顔景賢の旧蔵でした。本作もその一つで、小さな团扇に広大な空間を取り込んだ南宋絵画の逸品です。

大阪市立美術館 天王寺公園内

Osaka City Museum of Fine Arts

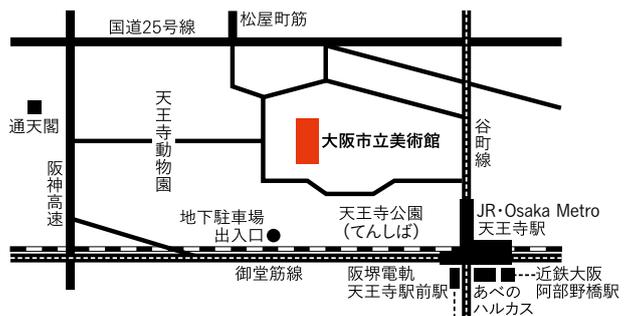
〒543-0063 大阪市天王寺区茶臼山町1-82

tel. 06-6771-4874 fax. 06-6771-4856

<http://www.osaka-art-museum.jp>

開館時間＝9:30～17:00(入館は16:30まで)

休館日＝月曜日(ただし月曜日が祝日の場合は翌平日)



交通案内:Osaka Metro御堂筋線・谷町線、JR「天王寺」、近鉄南大阪線「大阪阿部野橋」、阪堺電軌上町線「天王寺駅前」下車、または大阪シティバス「あべの橋」下車、北西へ約400m